

講演会 日清戦争の清国兵俘虜と『大日本帝国臣民』の形成

－作られた『文明』と『野蛮』－

講師 塚崎昌之氏

日時 2013年7月13日

3時間の講演会で、第一部として「日清戦争時に発生した清国兵捕虜」について、そして第二部として「第二次大戦中に日本に連行された中国人」についてお話し頂いた。日頃POW研究会では、第二次大戦中の捕虜について調査研究をしているが、今回の時代をさかのぼる日清戦争での清国兵俘虜の話には、半世紀ほどを経て起きる第二次世界大戦での捕虜問題のルーツを知る思いで塚崎氏の話聞きいった。

<第一部> 「日清戦争時に発生した清国兵捕虜」

大阪府の高校教諭である塚崎氏にとって、2校目の赴任先の学校に「朝鮮文化研究会」があった。この会はそれまでは主に踊り・料理・歴史を研究していたが、生徒の要望があり朝鮮史について勉強することになった。それは大阪万博の跡地である万博公園がこの学校の最寄りであり、公園の地下には戦争中海軍の弾薬庫に使用したトンネルがあって、このトンネル掘りには朝鮮人が数多く携わっていたからである。それを高校生らと勉強したことが、塚崎氏が後にこの問題を大きく調査研究する所以となった。



日清戦争時、日本に送られた清国兵俘虜は1000余名、その内死亡者は28～30名となる。佐世保に到着後、広島、松山、大阪、大津、名古屋、豊橋、東京、高崎、佐倉の各収容所に連行された。塚崎氏はこの事実を書物や新聞、また現地調査などで研究されて来た。

◎清国兵捕虜の渡日

1894年7月28日に捕虜82名が佐世保に到着したのを皮切りに、順次残りの捕虜達が広島から日本国内に収容されている。当初東京は計画の中に入っておらず、また各収容所に100名ずつ入れる予定であったが、結果的に東京には179名、また大阪には275名が収容されている。日露戦争時の捕虜は郊外に収容されたが、日清戦争時は「帝国の威信を見せる為、また帰国後はこの繁栄を故郷で伝えさせる」目的で、敢えて都会に収容所を設定したようだ。捕虜の扱いについては、国際法に則るよう指令を出している。また新聞各紙は彼等の到着をよく報じているが、最初は捕虜収容所を監舎、囚所などと記載して犯罪人扱いの記述が多く、後に俘虜廠舎に呼び名が統一されている。海軍大臣が佐世保に出した電報によると、「捕獲人中、西洋人は特別丁重に取り扱い、衣食住その他不自由なきよう、また清国人についてもかなり懇切に取り扱うよう、但し清国人は別に収容のこと」とある。西洋人と清国人を区別していることがわかる。このこと

は俘虜発生最初の戦争となる、1894年7月25日の東郷平八郎艦長の浪速を含む3隻の連合艦隊第一遊撃隊が、豊島沖で輸送船団を待ちうけ襲撃した事例でも、明らかな差別を見ることが出来る。

◎高陞号事件

1894年7月25日、清国の備船であったイギリス商船高陞号が英国国旗を掲げて航海中、日本連合艦隊の浪速に遭遇、白旗を揚げたが乗船していた清国兵が抵抗したので撃沈される。浪速の艦長東郷平八郎からの報告によると『沈没後カッターを出して船長を救助』とある。しかし高陞号に乗り込んでいたドイツ軍教師が、「支那人が兵器も持たず走るところを射撃。西洋人には理解できない。」と証言したことを香港の新聞が報道。それに対し海軍次官への電報によると、「この件は高陞号の船長が話していないから、もみ消そう。」という対応をしている。浪速に救助されたフィリピン人の水先案内人の証言は、「西洋人のみを探し救助。清国人については探そうともしなかった。」というものである。海軍大臣への電報には「船長、水先案内人等に金を与え」とあって、口封じをした様子が分かる。

◎日本民衆と捕虜の出会い

日本に連行した捕虜の扱いにも興味深いものがある。おりしも天皇は広島滞在中であり、まず広島へ清国兵捕虜を連行したが、汚れた姿では天皇に失礼だとのことで、急きょ遠くの坂下に移動させての「天覧」となった。その後、神戸、大阪、大津、名古屋、東京と列車で移動させているが、夜中にも関わらず、また近づく台風で大雨強風の最中でも各駅に大勢の見物人が集まり、拍手喝さいするものあり、罵声を浴びせるものあり、大変な騒ぎ。生徒を引率して来る教師もいる中、注目するのは女性の見物人の多いこと、しかも着飾って見に来ていることである。収容所に到着後も見物人は多く、菓子果物を売る店が出来、スリが横行している。動物園の珍獣を見る勢いである。日に二度庭での運動が始まると、それに合わせ見物人が増え、差し入れをする人まで出ている。それは少しでも捕虜を間近に見たい為なのだ。



馬車で護送される清国兵捕虜 ビゴー「ザ・グラフィック」より

◎捕虜の生活、死者と墓碑

収容中は被服寝具は中古の在庫品が、消耗品は現物支給され、治療は最寄り部隊があたり、食事は日本軍と同じ米一日6合が出されている。病院となったお寺や赤十字病院で撮影した写真や絵が残っている。黒田清輝やジョルジュ・ビゴーの描いた絵もある。在留一般中国人へのあざけりや嫌がらせも報告されている。

1895年8月18日から帰国が始まっているが、新しい服が支給され、皇后名の恩賜の義足・義手、(彼らが辨髪民族であった為)つけ毛の給与等があった。

28～30名の死亡者はその原因に銃創、結核、コレラ(帰国直前に流行)、脚気(大阪に多い)、

自殺等があげられる。大阪真田山に6基の墓があるが、墓石が和泉砂岩で作られたせいか傷んでいる。

疲労した清国捕虜を見世物として扱うことによって、日清戦争での日本の強さと日本が文明国として勝っていることを強く印象づけ、大日本帝国臣民の形成に大きな役割を持たせることになったのではないか。

<第二部> 「第二次大戦中に日本に連行された中国人」

従来の研究による「中国人強制連行」は、1942年11月22日東條内閣の閣議で決定、翌43年4月に開始された。中国軍「捕虜」と「劳工狩り」で捕獲された農民は、形式上中国法人「河北劳工協会」に一旦所属させられ、この協会と日本企業が雇用契約を取り交わした。1946年3月に作成された外務省報告書によれば、日本国内の135事業所に、38,935名を送出し、その内6,830名が死亡した。これとは別に1945年9月にまとめられた「移入華人労務者現況調」は事業所からの報告をまとめたもので、主に送還不能者名簿であったが、特に兵庫県からのものは外務省報告書にない事業所を含むことで貴重である。その兵庫県からの報告書に、尼崎大日電線34名、神戸大連汽船68名の中国人労働者の名簿が添付されていた。大日電線の中国人は、名簿の備考から1942年5月に拿捕されたオランダ貨物船ゼノタ号の船員だったと考えられる。

では拿捕船ゼノタ号の中国人船員の扱いはどうであったのだろうか。乗組員38名（うち4名は死亡）は尼崎で工場労務者として使用されている。しかし兵庫県の「華人労務者送還者名簿」「華人労務者死亡者名簿」「尼崎市史」「尼崎の戦後史」「兵庫県警察史」などに中国人労働者の記述があるが、彼等の移入経緯などには詳しくない。「海戦法規」第161条には、拿捕船を日本に回航する船員として使用するのには「拿捕船舶の船長や船員の同意を得られない場合は強制出来ない。」とある。では彼等は同意したのだろうか。彼等の日本在留の合法的な身分は、抑留者なのか、俘虜なのか、または亡命者なのか。

抑留者の場合は労働を強制されず、健康への配慮があり、差し入れや面会が許される。記録をたどっても外事月報などにもこの「ゼノタ」号の船員の記述は無い。では俘虜だったのか。その場合は氏名・健康状態などを中立国を通じて通告しなければならず、また原則的には家族との手紙の送付・受領が許される。国際法や陸軍省令を見てもこの中国人船員たちが法的な地位での「俘虜」であったとは考えられない。ただ1943年7月俘虜管理部長から各収容所長宛ての通知「拿捕船舶乗員タル俘虜ノ取り扱ニ関スル件」によると、本来は解放すべきところだが、それでは生活出来ない為、「人道的」立場から「俘虜」の取り扱いをする、とある。上層部は違法性の認識があったが、それを「合法性」があるかのように糊塗したのか。

類似例は1942年5月に拿捕されたオーストラリアの貨客船「ナンキン」号の中国人船員86名にもある。またこの時期、1068隻の拿捕船が存在しているが、その船員はどのように扱われたのであろうか。戦況悪化に伴い、彼等は「人道」的立場として形式的に「俘虜」として扱われたが、実質的には強制連行者と同じではなかったか。欧米人俘虜との扱いの違いはどうだったのか。中国人への蔑視はなかっただろうか。後の中国人強制連行の「合法」的な整備に影響を与えたのではないか。解明すべき点は多い。

(田村佳子)